親子の日常 前向く糧に

鳥栖の震災避難者が写真集

東日本大震災や福島第１原発事故で鳥栖市に避難した人たちの有志と大学関係者が写真集『とすのうた』をまとめた。親子の日常を切り取った写真に、そのときどきの心情を振り返るエッセイや詩を添えている。不安定な暮らしの中で、前向きになれた出来事や、子どもたちが笑顔で遊ぶ場面を収録。歩みだす糧にする記録集になっている。➡１面参照

「とりあえずの生活やめよう…大切な一日が始まった」

『とすのうた』はブックレットサイズで97ページ。広域避難の調査で昨年夏から鳥栖市を訪れている立教大学社会学部の関礼子教授(47)が発行した。大学院生の廣本由香さん(25)とともに聴き取りをする過程で、避難者とアイデアを出し合って生まれた。福島など4県から避難した13人が写真や文章を寄せている。

写真には原発事故が影を落とす。父親が娘を肩車している姿を撮影した写真には、こんな文章が添えてある。

《地面に近い位置ほど線量が高いと聞いてから、肩車する習慣になってしまった。鳥栖に来てからもつい、出かけるときは肩車》

一時帰郷した福島県浪江町の風景を切り取った女性はこうつづっている。

《一年ぶりの故郷は前進も後退もしていなかった。変わり果てたこの地に降り立つのが怖くて、車の中から写真を撮った。倒れかけた電信柱が寄り添って支えあっているように見えた。まるで震災直後の人々のように》

『とすのうた』の中の１ページ。震災から３カ月後の2011年６月、避難者が鳥栖市で撮影した二つの虹を載せ、「鳥栖に歓迎された気分」と、和んだ様子をつづっている

避難者の多くは父親と離れての母子避難。久しぶりに会った父親が残していった携帯ストラップを男の子が《たからもの》にして、握り締めている切ない写真も交じる。それでも、海水浴などの行楽やサッカー観戦後のスナップには子どもたちの笑顔があふれる。親たちの心配りが垣間見え、心境の変化もにじむ。

《避難生活では、『とりあえず』で一日一日をやりすごしている自分がいた。でも、子供の成長を見ていると一日一日が大事だと気付かされた。海に行った帰り道、のんびり歩く子供の歩幅に合わせて歩いてみた。もう、とりあえずの生活はやめようと…。お気に入りの雑貨を部屋に飾った。楽しくなるような部屋に変えてみた。大切な一日が始まった》

写真集には、心が和んだイベントや出会いも収録。地域の人たちに招かれての餅つきやそうめん流し、避難者の自助グループで出店したハンドメード展や朝市―。それぞれに感謝の言葉を記している。

《生き生きと生活していくきっかけをもらった》《話してくれてありがとう。話を聞いてくれてありがとう》

これまでに約半数の世帯が震災前の居住地に戻ることを選択。別れの写真も収めているが、引っ越し作業を終えてポーズを決める兄弟や、笑顔の集合写真を選び、湿っぽさはない。

福島市で今年春から家族4人そろっての生活を再開した小柳直枝さん(38)は「つらい出来事や後ろぼかりを振り返る、二度と開きたくない本にはしたくなかった。避難生活の経過をそのまま映し出した。子どもたちにも、成長したときに伝えたい」と話す。

写真集は関係者に配布済み。関教授や避難者有志は、これとは別に震災から2年半に当たる今月、寄稿を含めた聞き書き集をまとめる。

佐賀県の集計によると、県内に避難した人たちの数は、震災発生時から今年8月12日までの受け入れ実績で10都県から1955世帯511人。引き続き、9市町で90世帯227人が暮らしている。福島県からの避難者が最も多く、47世帯111人となっている。（井上武）

佐賀新聞社
※無断複製転載を禁じます。